

島に吹く風——周防大島の民俗自然誌——

安室 知

YASUMURO Satomi

【要旨】

日本人にとって風は単なる自然現象の一つではない。本論では、とくに風名に注目することで、風に対する多様な認識のありかたを導きだす。その上で、風の民俗分類を手掛かりに自然観の地域性について検討する。この時とくに周囲を海に囲まれる島（周防大島）に注目することで、地域的偏差はより明確になる。

島の中において風に対する認識のあり方を比較すると、さまざまな面で北岸と南岸とが対照的であることがわかる。北岸では北方向の風についてより細かく認識しているのに対して、南岸では南方向の風についての意識がひととき高い。それは、北岸の場合、北方向の風は海から吹き付ける風となり漁撈活動に多大な影響をもたらすのに対して、南方向の風は陸地から海に吹き出す風となり漁にはさほど影響がないためである。南岸の場合はその逆ということになる。こうした風をめぐる北岸と南岸との対比的性格は、周防大島を越え、日本列島全体にも敷衍できることだといえよう。

その一方で、周防大島は瀬戸内海の中では北に偏って位置しており、必然的に広く海が開けているのは南側だけである。そのため、周防大島全体としては、北方向の風よりも、南方向の風の方に敏感にならざるをえない。とくにマジに対する認識は強い。ひと言でいえば、周防大島では、南風は人の制御を受け付けない存在であるのに対して、北風は時に人の利用を許容する風となる。この点は、島の立地がもたらす、周防大島に固有なことであるといっていよい。

また、西風と東風については、周防大島の一般的傾向として、人は東風よりも西風の方により敏感であるといえる。さらに、西風と東風の違いとして挙げられるのは、季節風や台風といった大スケール（地球規模）の風との係わりについてである。西風は冬の季節風と、また東風は夏の台風とそれぞれ強く関連づけてとらえられている。

〔キーワード〕 風名、民俗分類、自然観、民俗自然誌、周防大島

一 はじめに

日本人の自然観にとって、風のもつ意義は大きい。哲学者の和辻哲郎は、日本を含む東アジアの風土をモンスーンつまり季節風により規定した(和辻、一九三五)。さらに、その風土類型をもとに、日本人の精神的特性を読み解こうとした。日本人の精神的特性を「忍従」と「受容」に求めることの可否はおくとして、日本人にとって風は単なる自然現象の一つではない。

こうした和辻の風土論を受け、民俗学者の北見俊夫は、柳田国男の民俗文化論との融合をはかりながら独自の民俗風土論を展開している。その中で、北見は横糸(自然環境)に季節風を、縦糸(歴史的文化形成過程)に稲作を想定し、その縦糸と横糸の織りなすものが日本の風土であるとした(北見、一九八九)。

和辻や北見が想定したごとく、日本の風土を理解し、日本人の自然観を問うとき、風はもっとも重要な鍵となるといってよい。当然、風は民俗文化を形成する大きな要素となる。そのとき、民俗学においては、季節風や台風のように日本文化を巨視的に捉える視点とともに、微視的つまり地域によりさまざまに変異する風の呼び名に注目することが重要な着眼点となる。その点を柳田国男は日本文化の軌跡に関連させて、以下のように述べている。

「日本文化の移動は陸地を歩いて北の端まで行ったように考える人もあるが、昔の日本は山が険しく陸路の交通は困難であった。事実日本海側の海上交通は早く開かれて津軽海峡を通り越し、少し太平洋側にでてから、東側を北に上ってきた文化と出会っているのである。このような古い日本文化の移動の跡を知るには海岸の研究をしなければならず、それには風の名前からはいっていきがよいと私は思っている。」(柳田、一九五八)

本稿は、風名に注目することで、風に対する多様な認識のありかたを導きだし、かつ地域において微細な違いを見せる自然観のありかたを検討することを主な目的とする。この時とくに、周囲を海に囲まれる島に注目する。それにより、風の認識について島ならではの特徴とともに、日本列島全域に敷衍できる特徴も見出すことができると考える。

二 風に見る日本の中の周防大島

(一) 日本列島に吹く風——研究史概観——

日本全体を見た場合、地域的な広がり注目してみると、風には三つのレベルの命名が存在することがわかる。

ひとつが、汎日本的なレベルで命名される風で、台風や季節風がそれに当たる。台風や季節風という認識は、近代になり気象知識が国民に共有されて以降、強められてきたものである。台風は、後述するように、「大風」や「マジ(南風)」の強くなったもの」という捉え方もいまだ民間伝承の中には残っている。また季節風の場合も、日常生活の上では季節風という認識の仕方はほとんどなく、むしろその土地土地で地方風としてさまざまに命名されている。

日本列島の場合、台風はもっとも重要な第一次産業である稲作に多大な影響を与える。ここでは詳しくは論じないが、イネの作期(とくに収穫期)と台風の襲来時期が重なるため、稲作農村においてはさまざまな風除けの民俗儀礼を生んでいる。

二つめが、日本列島の地方レベルで一定の広がりを持つ風名である。東北や九州など、日本列島をいくつかの地域単位に分けたとき、そこに共通してみられるものから、たとえば「○○オロシ」や「○○ダシ」というような、ある山の麓や川の流域といった広くてもせいぜい県単位の広がりしかないもので、その幅は広い。

それはいわゆる地方風と呼ばれるもので、前述のごとく、季節風に伴

うものが多い。つまり地域ごと卓越する季節風はさまざまに命名されている。日本列島の場合、季節風には大きく分けると、冬の北西季節風（シベリア高気圧から吹き出す風）と夏の南東季節風（小笠原高気圧から吹き出す風）がある。しかし、そのどちらが住民生活に大きな影響をもたらすかは生活の場がどういった地理的条件のところに立地するかにより異なっているし、また立地だけでなく、地域の生業のあり方によって風の認識は大きく異なってくる。

そして、三つ目が集落単位で命名される風である。当然その風名はその集落内でしか通用せず、それだけにきめ細かく地域の暮らしと係わってくる。また、風に関する伝承も個人単位で、かつ固有名詞が登場するなど具体性を帯びたものとなる。

さらにいうと、前述のような地域的広がりによる類型化だけでなく、生業やそれに基づく生活環境の違いによっても、風名を共有する基盤は異なってくる。風名の場合、大きくは漁業者と農業者、ときに都市生活者を含めて、それぞれ類型化が可能である。しかし、これまでの研究および資料の蓄積は大きく沿岸部に偏っているといわざるをえない。当然そこには風に敏感なのは漁業者や海運関係者であるという所与の前提がある。^(注)

こうしてみると、日本列島には広狭さまざまな領域を持つ風名が存在していることがわかるが、いったい日本全体にはどれだけの風名があるのだろうか。『風の事典』（関口、一九八五）によると、日本には二一四五の風名があるとされる。そして、それは、風の方位別に、強弱・寒暖・季節・吹く時間などにより、大きく四つの系統に分類が可能だとされる。具体的には、沿海部については、瀬戸内・西九州を中心に四国・山陰にわたって分布する西日本系統、能登・佐渡から日本海北部一帯に広がる日本海系統、紀伊半島以東の太平洋岸に分布する東日本太平洋系統の三系統である。さらにそれに、琵琶湖・霞ヶ浦等の内水面系の

系統が付加され、都合四系統に分けられている。

（二）周防大島の位置と風

フィールドとして本論で注目するのは周防大島（山口県大島郡）である。周防大島は北緯三三度五五分、東経一三二度一六分、瀬戸内海の西部に位置する。二〇一五年現在、島の人口は約一八〇〇〇人、面積は約一二・五km²で、瀬戸内海に七二七ある島の中では淡路島・小豆島に次いで三番目に大きい（周防大島町、[online:outline-hm.jp](http://online.outline-hm.jp)）。国土地理院による正式な島名は屋代島であるが、周防灘に浮かぶ大きな島ということで周防大島の呼称が一般的である。民俗学では宮本常一の出身地としても知られる。

島の中央には嘉納山（六八五m）や嵩山（六一九m）があり、全体に傾斜地が多い。漁業が主産業であるが、内陸地では温暖で雨の少ない瀬戸内海気候のもとミカンなどの果樹栽培がおこなわれる。

周防大島には、山口県漁業協同組合に属する東和町支店、白木支店、浮島支店、日良居支店、安下庄支店の五支店のほか、久賀漁業協同組合と大島町漁業協同組合の二漁協がある。このうち、今回調査対象としたのは、白木支店（沖家室）、日良居支店（日良居）、安下庄支店（安下庄）、久賀漁業協同組合（前島）の四漁協である（括弧内は話者の居住地）。先に掲げた関口武による風名の系統分類に従うなら、周防大島の風名は西日本系統に属することになる（関口、一九八五）。しかし、もう少し微細に見てゆくと、西日本系統の中でもさらにいくつかの支系が存在することが分かる。たとえば、おもに南風の風名に注目すると、西日本系統の地域はハエとマジの地域に大きく二つに分けることができるし、それ以外の要素を入れると多様な支系が設定可能となってしまう、系統に分類すること自体あまり意味のあることではなくなってしまう。

これまでの研究たとえば関口武による風名分布の汎日本的な把握や、

宮本常一による風名の記載（宮本、一九三六・一九九七）を見ると、周防大島は島全体を一つの伝承単位とされてしまうことが多い。まれに集落ごとに風が特徴あるものとして記述されても、けっきょくのところ最終的には周防大島で一括されてしまう。それは、ひとつには、風名を他の民俗と切り離し、かつそのみを辞書的に集成しようとしたためである。しかし、周防大島には先の漁協の分布をみても分かるように七組織が島の周囲には存在している。集落の単位で見ればさらに多く存在するといつてよい。そうした微細な視点をもって周防大島を眺めると、ひとつの島の中にあっても、風と人の暮らしとの間には多様な関係性が存在することがわかってくる。

本稿で注目するのは、風名のみではなくその背景にある住民の生業であり生活全般である。それはひいては自然と向き合う住民の感性（自然観）をあきらかにすることにもつながる。

そう考えると、たとえ同じ風名であっても、それを伝承する地域によってその意味する内容や価値づけは微妙に異なってくるであろう。周防大島の場合、詳しくは後述するが、集落によって同じ風名が正反対の意味を持つ場合がある。その意味で民俗自然誌という視点に立つなら、周防大島は一括りにはできないし、微視的に検討することで周防大島における人と自然との関係には多様な地域性と一定の法則性を見いだすことができる。本稿では、島嶼という地形的には閉ざされた環境にあって、風を手掛かりに人と自然との関係から地域性とその規則性を発見することとが、冒頭「はじめに」に掲げた点と併せ、もうひとつの目的となる。

次章では、まずはじめに周防大島の四地点（図1）において調査した風の認識のありかたについて、調査地ごとにデータを示すこととする。従来、周防大島として一括されることの多かったものを微視的な視点で眺めたとき、いったいどのような人と自然との関係性が見えてくるのか、集落単位の民俗自然誌として描いてみたい。



図1 調査地点（周防大島）

なお、調査は二〇〇六年八月におこなっている。聞き取りの時間設定および記載は、とくにことわりのない限り二〇〇六年時点のこととする。

三 風の認識——周防大島における地域差——

（一）沖家室に吹く風

沖家室は周防大島の南岸にある小島で、一九八三年には大島と橋でつながっている。大島側を地家室、小島側を沖家室といっている。タイ一本釣りやフカセ釣りの村として有名で、年間をとおしてタイ漁がおこなわれるが、一本釣りではブリやカンパチなども時期に応じて漁獲されて

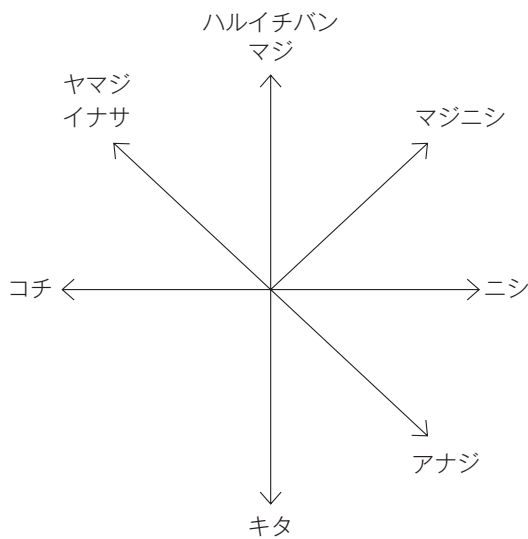


図2 沖家室に吹く風

いる。また沖家室は、移民の島としても知られ、明治以降、多くの人がハワイをはじめ南米などに渡っている。

①通常の風(図2)

・マジ(南)

マジは真南から吹いてくる風である。夏は日和(好天)に吹く(悪天候には吹かない)。ほとんどが昼から(午後二時か三時ころから)吹き出す。反対に、朝からマジが吹くようなときは、その後かならず日和は悪くなる。朝からマジが吹くと、波がどんどん高くなり、潮のうねりも強くなっていく。とくに、それと引き潮が重なったときにはハヤト(海域名)のうねりはとくに強くなり漁や航行は危険である。

夏、キタ(北風)が朝のうちから緩やかに吹いて、海が光るような状態のとき、海面には小魚がたくさんいる。そして、午後になりマジが吹き出すと、それにより水温が変わるため、海底にいたエイなどの魚が水面近くに上がってくる。また、そうした魚をさらに大きな魚が追ってや

ってくるため、一本釣りで大きな魚がよく捕れる。そうした状態の後、何日かすると雨が降る。

大きく強い風にはハルイチバンがあるが、「春一番は南風の始まり」というように、ハルイチバンはマジの吹き初めの風である。そうして、マジがハルイチバンとして吹いて以降、周防大島に台風が来るようになる。また、マジが吹くと夏がきたともいう。台風の時期にはマジはとくに強く吹く。また、台風にはマジは付き物である。反対に、マジが吹かなくなるのは九月半ばのことで、周防大島近辺に台風が来なくなるとともにマジの季節も終わる。そうすると、マジが変わってキタが吹くようになる。

春とくに四月にはマジにより危ない目に遭うことが多い。小水無瀬島あたりで一本釣りをしていると、船上で身体にはひとつも風が当たっていかなくても、島の山の本がマジで揺れていることがある。そうすると見る間に波が大きくなってきて、逃げ場がなくなってしまう。春のマジは風が来る前に波が立つため要注意である。

・イナサ(南東)

イナサは春に多く吹く南東の風である。漁に差しつかえることはない。近年はあまり吹かない。

・ヤマジ(南東)

ヤマジはマザン(山名)から吹き下ろしてくる風のことである。ヤマジという言い方は近年はあまり使わない(一世代前の人がよく使った)。

・マジニシ(南西—南南西)

マジニシはマジの一種で、本当のマジより西側から吹いてくる。マジと同様に強く吹いて、大きな波を立てる。おもに夏の風だが、夏のおわりから秋にも吹く。マジニシが吹くと寒くなる。

・ハルイチバン

マジの吹き初めをハルイチバンという(前述)。春から夏への変わり

目に吹く強風である。

・キタ

キタは周防大島から吹いてくる風である。沖家室では陸からの風となるので怖くない。周防大島中央に聳える山からの吹き下ろしでも、吹いてくる距離は短いため、マジに比べると、波は立たないし、うねりも少ない。したがって、キタが吹いても漁に差し支えることはない。夏、朝のうちからキタが緩やかに吹くと、海が光るような状態になり、海面には小魚がたくさんでてくる。その後、マジに風が変わると、前述のように、大魚が好漁になる。

・アナジ（北西）

アナジは秋から冬にかけて吹く北西の風である。これが吹くと、日和は悪くなり寒い。強風で、雨を伴うことが多い。減産に降らないが雪をもたらすのはこの風である。近年はあまりアナジとはいわなくなった。アナジは昔はよく吹いたが、今は吹かないともいう。

・コチ（東）

コチは春四月を中心に吹く東風である。通常は穏やかに吹くが、ときにはかなり強く吹くこともある。コチの場合、少しくらい強く吹いても、山（半島）の影に入れば漁をおこなうことは可能である。近年は希にしか吹かなくなった。

・ニシ（西）

沖家室からみると、下関と門司との間は陸地が低くなっているが、冬、そこを抜けて吹いてくる西風がニシである。ニシは雪をもたらすことがある。ニシにより伊保（柳井市）あたりが大雪になったり、平郡島にもよく雪を降らせた。ただし、どんなにニシが吹いても沖家室まで雪が来ることはなかった。

②突発的な風

・台風

マジの吹き初めがハルイチバンで、九月半ばになるとマジがキタに変わるが、その間つまりマジが吹いている期間が台風の襲来時期となる。マジが吹かなくなると台風も来なくなる。

・ハヤテ

海上において、突然、強烈な風と雨に遭うことがある。そうした状況をもたらすのがハヤテである。ハヤテは梅雨のころによくおこる。風向きとしては西風が多い。ハヤテの前兆としてソバエグモが出る。最初に雷がごろごろ鳴り、次に雨が降り出す。そして、強い雨を伴うため、風が真っ白く見える。そのためハヤテがくると一寸先も見えないくらいである。そうした状態が二〇分くらい続き、その後はすぐに収まる。ハヤテに遭ったときは船の中に入ってじっとしているしかなく、慌ててはいけない。ハヤテがどのようなものか心得ていれば、そうしてやり過ごすことができるが、慌てて船を移動させたりすると危ない目に遭う。ハヤテは昔はよくあったが、近年はなくなった。

・竜巻

一〇月、風も波もない状態のとき、沖家室からみて西方、ちょうど上関（熊毛郡上関町）あたりに、雲がじょうごのように下がっているのが見えることがある。そうすると、五分も経たないうちに沖家室まで竜巻が来た。このときは、船のオモテ（船首）を風下に向け、斜めに風を受けるようにする。また帆柱を倒して、船を風に向けて走らせるようにする。

・ヤマシタノカゼ

海上を航行中、山の際を通るときには船を転覆させるような風が吹くことがある。恐ろしい風で、それをヤマシタノカゼ（山下の風）という。うまく半島や島の陰に隠れてこの風が当たらないようにすれば、漁をおこなうことは可能である。

③天候の予兆

・平郡島（柳井市）の上に丸い雲が浮き上がるように見えると、必ず突風が来る。「島に傘釜かぶると突風が来る」といい注意した。

・明神山の上に風船のように丸い雲が上がると、南風が強くなり、ヤマシタノカゼが吹く。この雲が見えると、あわてて近くの湊に入るようにする。

・ハヤテが来て天候が悪くなる前兆としてソバエグモと呼ぶ雲がでる。
・雪が降るときにはアナジの風が吹く。近年はなくなったが、昭和三〇年代にはたまに雪が降ることがあった。今は、年に二・三度、気温が零度になることはあるが、氷が張るくらいで雪にはならない。

④ 風と潮との関係

マジが吹くと、大きな波を立てる。瀬戸内海の西部は豊後水道（佐多岬）を通して潮が入ってくるため、そうした入り潮とマジとが合わさると相乗効果で波が大きくなる。反対に、引き潮のときは、マジと波はぶつかる感じになり、うねりがひどくなる。この時のうねりは危険である。キタのときのうねりとマジのうねりとは明らかにちがう。

（二） 安下庄に吹く風

安下庄は周防大島の南岸にある集落である。南岸の集落の中では最も大きい。安下庄は、久賀などの北岸の集落に比べると、「冬は着物一枚少なくてよい」というほど温暖である。漁が盛んであったころは、ゴチ網、イワシ地引き網（後にイワシ船曳網に変わる）、手繰り網、延縄が主におこなわれた。ゴチ網では一年中タイを捕ったが、沖家室を中心とするタイの一本釣り漁と競合するため、規制が強化されていた。

① 通常の風（図3）

・マジ（南）

マジは七月から九月にかけて吹く強い南風で、安下庄ではもっとも恐ろしい風とされる。とくに九月の二十日・二百二十日ごろは注意を要

する。安下庄の場合、地形的に湾が南に開いているため、これまでマジによる被害を何度となく受けてきた。また、洋上でもマジは風を遮るようなカゲがないため危険な風となる。マジが強くなったものが台風だという人もいる。

・フキオロシ（南南東）

山を越してくる風なのでフキオロシ（吹き下ろし）という。マジが深山など平郡島の山を越した後、海上をわたって安下庄にやってくる。

・イナサ（南東）

イナサは南東方向から吹いてくる風をいう。イナサグモ（イナサにより流される雲）がでると雨がやってくる。

・ヤマジ（南西）

ヤマジは春に吹く南西の風をいう。これが吹くときとは風で漁をすることはできても、次の日はかならず荒天となり漁ができなくなる。「ヤマジが吹いたけ、明日は時化」といった。

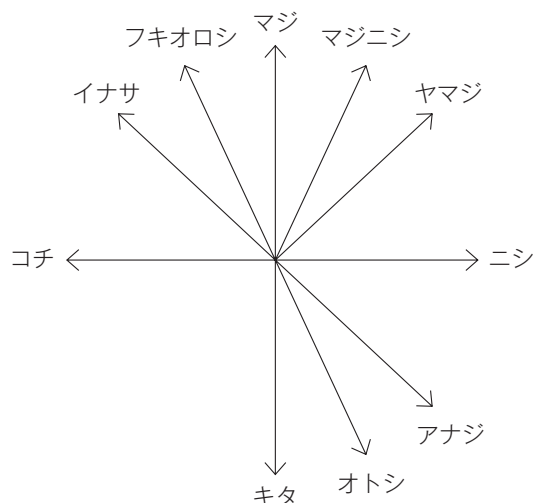


図3 安下庄に吹く風

・マジニシ（南西―南南西）

マジニシは西寄りに吹くマジをいう。

・キタ（北）

キタは周防大島の陸地から吹いてくる。波はあまり立たないので、漁に支障はない。ただ、沖に出るほど風は強くなるし波も立つ。

・オトシ（西北西）

フキオロシと同様、山から吹き下ろしてくる風をいう。オトシの場合は、キタが周防大島の山を超え、安下庄に吹き下ろしてくるものをいう。弱いキタなら山で止まり安下庄まで来ないが、強いと山を越してくる。そのため、吹くときには必ず強い風となる。ただ、風は強いものの、漁には大きな支障はない。

・アナジ（北西―西北西）

秋から冬にかけて吹く、西北西ないし北西の風をアナジという。それほど漁に影響はない。

・コチ（東）

東風をコチという。普通の東風は一年じゅう吹くが、それをコチとは呼ばない（ただし東風をコチという人もいる）。おもに八・九月に台風の前触れとして吹く風をいう。台風が来る前、一―二日の間、コチが吹く。台風がよいよ近づくと「コチがしこる（激しくなる）」といった。コチは風とともに雨を呼ぶ。そのためコチは怖い風となり、漁にはよくない。

・ニシ（西）

冬の西風をニシという。風速一〇メートルに達するため、冬の風なかではもっとも強い風である。漁には注意を要する。

②突発的な風

・台風

マジが強くなったものが台風であるという人もいる。現在ニュースの

天気予報を見ると台風には目があることが理解されるが、そうした映像がないころは、夏に時々やってくる暴風雨をマジが強くなったものだと考えていた。

周防大島近辺に来る台風は豊後水道から入ってくることが多い。南東方向の雲行きが怪しくなり、雨がそちらからやってくるので、台風的位置がわかる。その前触れとなる雲をイナサグモ（雲としてはとくに特徴はなくイナサによって流される雲をいう）と呼ぶ。イナサグモが出ると「ぼちぼち台風が来る」といった。これは台風並みに強いマジの時にもいう。

台風が周防大島の西側を通ると強烈なマジが来る。台風は大島の東側よりも西側を通ったときの方が、安下庄にとっては風が強く被害が大きくなる。台風が大島の東側を通るときにはマジはない。

台風の場合、まずコチが吹いて、次にマジになり、そして台風が来る。コチの次にマジが吹いたら、たいてい台風になる。コチは台風の少し前に吹くが、マジは台風の襲来とともに吹く。ただし、コチの直後に台風が来ることも希にはある。

台風が来るとわかると、船を湾ではなく、川の中に待避させた。かつて漁船は小型だったので、そうしたことができた。待避させるとき、船は川の奥から順に何十艘と入れられる。奥の方が安全ではあるが、船を出すときには手前（河口部）から順番なので、奥に行くほど時間がかかる。たとえ船を出すのが遅れても、どうせ台風の後は一―三日は漁はできないので、漁の機会を失うことはほとんどない。

・ハヤテ

突風のことをハヤテという。強い雨を伴った危険な風である。風向きは一定しない。おもに春に吹くが、梅雨の末期にもみられる。漁の最中、ハヤテに遭うと急いで避難しなくてはならない。

③天候の予兆

・テレビやラジオの天気予報がなかったころは、朝に雲を見て、その日の風や天候を判断した。第一に雲、第二に風を見る。そうしたことがとくに上手な人が村にはおり、若いころはそうした人に相談したりもした。

・イナサグモ（いなさ雲）がでると台風が近い。

・マジグモ（まじ雲）がでると雨になる。

④ 風と潮の関係

・満ち潮の時はマジになる。

・引き潮の間はマジはない。

（三）久賀に吹く風

久賀は周防大島の北岸にある集落である。渡船で結ばれる前島から久賀にやってくる人もいる（話者は前島に居住し、船で久賀と往き来する）。前島の住民は久賀漁協の組合員になっている。漁としては、タコツボと刺し網を中心に、貝打瀬、底引き網、アナゴ縄（延縄）、ダイ網など多様である。中でもタコ漁は一〇月の禁漁期を除きほぼ一年中おこなわれる。

① 通常の風（図4）

・マジ（南）

マジは周防大島の山から吹いてくる南からの強風である。たいていはマジは一日で収まるが、三日続くこともある。そうしたときのマジは「黒い風」になる。また、台風が周防灘に入った時には、最初はキタが吹き、次いでコチになり、その後にマジになる。

・ヤマテ（南南東）

ヤマテとは秋から一月くらいまでの間に吹く南風をいう。夕方になると、周防大島のダケノタマ（嵩山…六一九m）を越して吹いてくる。ヤマテの場合、ソバエ（前触れとなる雨雲）があり、はじめに雨が降って

から吹きだす。夕方になると吹いてくるため、「ヤマテ小僧、ハエランヤ」といった。

・ニシマジ（南西）

八月の月々も暑い時分に吹く南西風をニシマジという。これが吹くと次の日は天気になるため、漁には良い。ニシマジが吹いて「西雲が流れると、明日は良い日和」といった。

・マジニシ（南西）

ニシマジと同じか（未確認）。

・キタ（北）

北風をキタといい、秋になると吹きはじめる。久賀あたりはキタが強く、波を大きくするため、漁に支障がでる。強いキタをオオキタという。キタは潮が引くとおさまる。

・キタゴチ（北東）

北東風をキタゴチと呼ぶ。

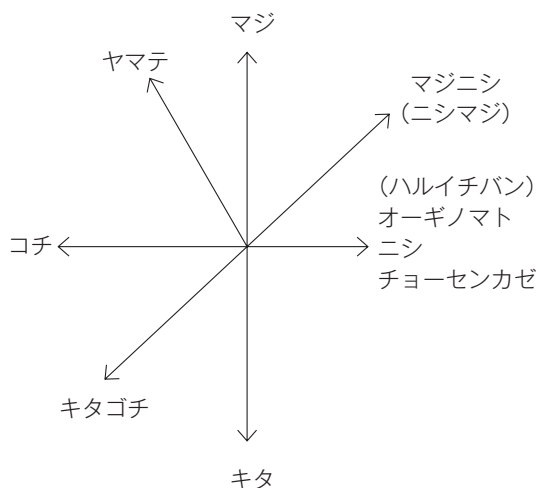


図4 久賀に吹く風

・コチ（東）

コチは東風でマジの前兆として吹く。「コチがしこるとマジになる」といい、コチが強くなるとマジに変わるとされる。とくに台風の時にそういう。

・ニシ

ニシとは西風のことだが、強い西風をオオニシという。

・チョウセンカゼ（西）

一二月暮れから二月にかけて吹く西風をチョウセンカゼ（朝鮮風）という。また台風の時にも吹く。強く吹くと沖の方に出ることができないので、漁には良くない。また、この風がひどいときには、久賀から北に五キロほどのところにある前島（話者の居住地）に往き来することができない。

・オーギノマト（西）

オーギノマト（扇的）は西風で、昼間に吹いていても夕方には風になる。

・ハルイチバン（西）

オーギノマトをハルイチバン（春一番）とも呼ぶ。

②突発的な風

・台風

南からやってくる台風が周防灘に入った時には、最初はキタが吹き、次いでコチになり、その後マジになる。このときのマジは強烈で、船が岸壁に打ちつけられるといった被害が出ることがある。台風の時、「コチがしこるとマジになる」ので気を付けないといけないという。

・フキモドシ

フキモドシは台風の時に吹く。山に当たって戻ってくる風をいう。マジ（南風）が吹いて、その後オオギタ（強い北風）になったりすると、その風をフキモドシという。

・ハヤテ

ソバエが出たあと一気に吹いてくる南西の風をハヤテという。雨足がひどくなってくるとハヤテが吹く。一―二月に多い。ハヤテは一時的には強く吹くが、すぐに収まる。

③天候の予兆

・かつて日の入りを見て次の日の天気を占った。雲と太陽の位置関係から判断して、日の入りが「良い」「悪い」といった。「悪い」と次の日は雨になる。

・岩国の上（北）の方、イヌイ（北西方向）を見て天気を占った。イヌイにだけ雲があり真っ黒くなっていると、「イヌイが悪いので、明日は雨」といった。また、反対に周囲は雲ばかりでもイヌイに雲がないと、「イヌイは過ぎたので、明日は日照り（陽が出る）」といった。

・久賀あたりでは、「前島に雪が積もったら、その年は雨がが多い」という。同様に、「前島に雪が積もったらその年は豊作」ともいった。

・予兆の格言

「カキ（サイリョウカキ）の木に実がたぐさんなった翌年は大きな台風がくる。」

「クロガネモチに赤い実がたぐさんなった年は大風（台風）が多い。」

「ブト（ブヨ）が出てくると明日は雨になる。」

④風と潮の関係

・とくに西風と北風は潮の影響を受けやすい。たとえば、キタは潮が引くとおさまる。

・風は潮の影響を強く受ける。たとえば、潮の満ち引きが大きい大潮の時は、風も強くなるし、台風もひどくなる。

・メキリ（メッケ）といい、もっとも潮が引いたところを境にして、風の勢いは徐々に衰える。メキリとは「目を切る」こと、つまり変わ目（転換点）の意味だとされる。また、そうした状態の潮（最後に引

く潮)をメキリジオと呼ぶ。なお、干潮の直前をメキリということもある。その場合は、メキリの後、潮が引くとともに風が収まる。

(四) 日良居に吹く風

日良居は周防大島の北岸にある集落である。日前、土居、油良の三集落からなる。日良居でおこなわれる漁の暦は以下の通りである。一〇月から一月一五日までは、フクナワ(フグ延縄)。一二月から四月まではソコビキ(底曳き網)。五月から八月まではハモナワ(ハモ延縄)。そうした主となる漁の合間には、タチウオを釣ったり、たたき網でタイを捕ったりする。

① 通常の風(図5)

・マジ(南)

夏に吹く南風をマジという。盆までは夕方になると吹いてくる。方角としては安下庄からの風となる。漁師は夕方、マジが出てきたのを潮時

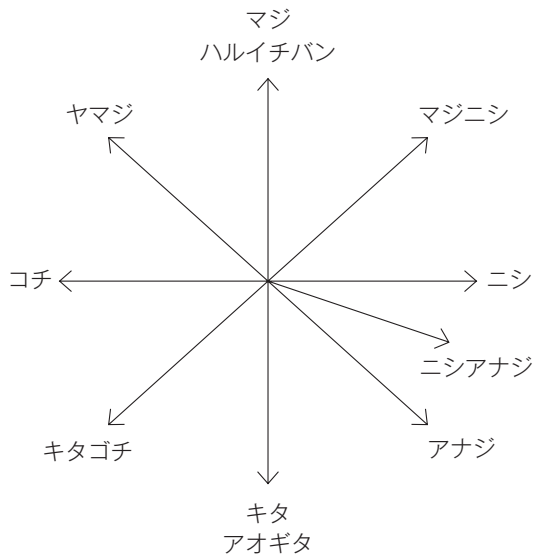


図5 日良居に吹く風

に漁を終え晩飯を食べに家に帰るようにした。そして、晩飯を食べる時には風が無くなっている。日良居では、マジが吹いても波はそれほど立たないし、漁に差し支えるようなことはない。

ただし、通常は日良居など周防大島北岸沖で漁をしているものが、南岸沖に行ったときにマジにあうと怖い思いをすることがある。南岸沖ではマジは大きな波を立て、また風よりも先に波が先に来るので、波の予測ができず対処が難しい。話者のひとりには、実際に家室沖でマジにあったときには、船が転覆するかと思うくらいの波で、一緒に乗っていた妻には転覆に備えて長靴とカップを脱ぐように言い、あわてて家室のハト(港内)に逃げ込んだことがあるという。

・ハルイチバン(南)

夏になるとき吹く南風をいう。

・マジニシ(南西)

マジの一種で、南西風をいう。

・ヤマジ(南東)

マジの一種で、南東風をいう。

・キタ(北)

キタは冬に吹く北風である。アナジやニシほど怖い風にはならない。

沖で漁をしているときには、オイテ(追い風)になるので日良居のハトには帰りやすい。また、オイテは底曳き網漁にも用いることができた(後述)。

オイテとは北寄りの風全般を日良居では指しているが、それは沖から陸(日良居)に向けて吹く風となる。ただし、だからといってキタはかならずしも安心してよい風ではない。むしろ要注意の風で、そうした注意を怠らないからこそオイテに使うことができる。

・ヨギタ(北)

夜に吹くキタなのでヨギタという。夕方から吹きだし、翌朝まで吹い

ている。ときには昼くらいまで残ることがある。

・アオギタ（北）

アオギタは一度吹き出すと、一〇日間は吹き続く北風である。その間は漁には出られない。

・キタゴチ（北東）

キタゴチは、盆過ぎから吹く北東の風である。冬は朝から吹く。風は強いが、二日も吹けば止む。漁にはあまり良くない。無理すれば漁に出れないことはないが、波が一・五メートルを超えると恐ろしくて漁をしていられない。

・アナジ（北西）

アナジは冬に吹く北西風で、とくに一―二月は台風並みに強く吹く。日良居ではもっとも強い風で、漁への影響は大きい。強く吹いているときはもちろん漁には出られないが、岸では大丈夫だと判断し漁に出たときも沖では風の勢いが強く船が遠くまで流されてしまうことがある。

・ニシ（西）

ニシは冬とくに一―二月に強く吹く。朝から吹くこともある。アナジとともに、台風並みの強い風になる。そのため漁への影響は大きく、ニシの時には漁に出ることができない。

・ニシアナジ（西北西）

ニシとアナジの中間の風である。ニシやアナジとともに漁にはよくない。

・コチ（東）

東風をコチという。漁にはほとんど影響はない。

②突発的な風

・ハヤテ

ハヤテはいきなりやってくる強風のことである。夏の終わりで降、雨が降った後に来る。ハヤテに一定の風向きはない。前兆としては、北

（広島）の方に雲が変な形で見えたり、空に向けてタチモノ（筋状に雲が立つ）があらわれたりする。

ハヤテは漁のときもっとも気をつけなくてはいけない風である。ベタナギのため安心して漁をしていると、いきなり吹いてくるので恐ろしい。また風がくるかと思っているうちに、いきなり大きな波がきたりする。日良居沖（安芸灘）は水深が浅いので、ハヤテのような風の影響が波にもろにでる。

・台風

台風はその進路により、風がマジから始まるか、コチから始まるかの違いがある。台風の進路は雲の流れをみると予測できる。雲が西に流れるか東に流れるかで判断する。

台風が周防大島の東方（四国の方）を通過して抜けるときは、風はコチから始まる。まずコチが吹き、次にニシになり、そしてマジに変わる。こうした進路をとるときが、日良居としては怖い。反対に、周防大島の西側（九州側）を通過して台風が抜ける場合には、マジから風が始まり、次にニシになる。ニシに変わると、日良居あたりでは風はだいぶ弱まっている。また、台風が豊後水道（九州と四国の間）を通過するときは、台風が周防大島の北を通過することが多いので、そのときは、風はコチから始まり、ニシに変わり、次にマジになり、さらにコチに戻る。

③天候と漁の関係

・漁は一般に風があるのを嫌う。日良居沖は水深が浅く、風の影響が波に出るからよけいである。

・日良居の漁師は、漁にでるときに天気によければ、その後に雨になっても晩まで何とか我慢して漁をするが、はじめから風が吹いたり雨が降っていたりすると、漁には出ないことが多い。

・漁があるとき（魚が捕れる時期）は、一メートルの波ぐらいなら漁にでるが、それ以上の時化になると漁には行かない。

・海難事故があると漁協の組合員はみな漁を休んで救助することになっている。そのように海難事故の間は営業中止になるので、みな他人に迷惑をかけないよう時化のときは無理して漁に出たりしない。

・ハヤテにあって急いでハト（港内）に入らなくてはならないときでも、最寄りのところではなく、やはり自分のいつも使っているハトまで帰っていく。そのために遭難することもあった。自分のハトだと停泊する場所も決まっているが、他所のハトだとどこに船を繋いでよいかわからず、どうしても遠慮してしまう。

・オイテ

日良居沖で底曳き網漁をしていると、キタ・キタゴチ・アナジといった北寄りの風はオイテ（追い風）にもちいることができた。追い風があると底引き網を引きやすいので、それを利用して漁をおこなう。そうした漁に利用する追い風をオイテという。底曳き網の場合、日良居から船を出すときはいったん北上して、そこから日良居に向けて戻りながら漁をおこなう。そうすることで、北寄りの風をオイテに使うことができる。そのため、手頃な北寄りの風が吹くときは、「ええオイテじゃの」といった。

五 島に吹く風——風に対する意識とその傾向——

（一）風の認識にみる島の地域性——北岸と南岸——

島の北岸にある集落（久賀、日良居）と南岸にある集落（安下庄、沖家室）とでは、同じ風名を付けていても、その意味合いが大きく異なることがある。たとえば、北岸集落では北方向の風について、オオギタやキタゴチなどを設けてより細かく認識しているのに対して、南岸では南方向の風についての意識がひとときわ高い。

それは、北岸の場合は、北方向の風は海から吹き付ける風となり漁撈活動に多大な影響を与えるのに対して、南方向の風は陸地から海に吹き

出す風となり漁にはさほど影響がないためである。

逆に、南岸では、北方向の風は陸地からの風となるのに対して、南方向の風は広大な海を渡ってくるため波を大きくするなど漁に与える影響は北方向の風とは比べものにならないほど大きい。そのため、南岸では南系統の風に対して敏感となる。たとえば、安下庄では、南系統の風を、マジ（真南）のほか、ヤマジ（南西）、マジニシ（南南西）、フキオロシ（南南東）、イナサ（南東）というように細かに分類・命名している。このうち、イナサは北岸ではまったく聞かない風名である。

こうした風をめぐる北岸と南岸との対比的性格は、周防大島という小規模な島を越え、日本列島全体にも敷衍できることだといえよう。

また、北岸と南岸との対比的性格を象徴するもので、かつ周防大島ならではの特徴として注目されるのが、南風を意味するマジに関する位置づけである。周防大島は瀬戸内海にあっては、北に偏してある、つまり中国地方に近く、四国地方とは大きく海を隔てた立地にある。行政的にも中国地方の山口県に属する。

その結果、周防大島は、瀬戸内海にあって周りを海に囲まれているとはいっても、実際には広く海が開けているのは南側だけである。北側にも海はあるが、すぐに中国地方の陸地が迫っている。そうすると、周防大島の場合、先にも指摘したように、漁業者にとっては、海を長く渡ってくる風の方が大きな波を立てたりして、より注意を要する風になる。そのため、周防大島全体としては、北方向の風よりも、南方向の風の方に敏感にならざるをえない。となれば、南系統の風であるマジに対する認識については北岸と南岸を対照すると、その違いはより鮮明となる。

北岸にある日良居では、マジは周防大島の山越にやってくる風で漁にはなら影響はなく、むしろ夕方この風が吹いてくるとそれがその日の漁を終えて家に帰る（夕飯時を知らせる）風として認識されていた。また、同じ北岸の久賀では、台風襲来時にさえ気をつけておけば、マジは

ほとんど漁に影響を与えることはない。このように北岸の村では、マジは生業や生活を強く規定するような風ではない。

そうした北岸の村に対して、南岸ではマジはもっとも注意を要する風となる。それは台風との関係で顕著である。南岸にある沖家室ではマジが吹く期間はそのままた風の季節と重なりとされるが、逆から見るとマジはハルイチバンに始まりその年最後の台風で終わるという認識もある。また同じ南岸の安下庄ではマジが強くなったものが台風であるとされる。このように、突発的で大きな被害をもたらす台風と夏に卓越する南風マジとの関係を強く意識するのは南岸の集落では一般的な感覚である。

また、瀬戸内海の西部にある周防大島の場合、マジは豊後水道を通る潮の影響を大きく受けることになる。しかも周防大島は、前述のように、瀬戸内海の中では中国地方寄りにあるため、南系統の風の方が海を渡ってくる距離がはるかに長い。それが豊後水道からの流入する潮の流れと一致したとき負の相乗効果を生み、マジをもっとも注意を要する風として認識させることになる。

象徴的な言い方をすれば、周防大島では、南風は人の制御を受け付けない存在であるのに対して、北風は時に人の利用を許容する風となる。北風は冬場においてはマジと同様に注意を要する風とされる一方で、人による利用もおこなわれる。

たとえば、北岸の村では冬場に底曳き網をおこなっているが、北系統の風を利用して沖から岸に向けて風に押されるように（つまり北風を追い風にして）網を引いていた。そうした風をオイテ（追風）と呼んでいる。日良居では、キタ（北）、キタゴチ（北東）、アナジ（北西）の風がオイテに用いられている。

こうした冬に卓越する北系統の風を利用する漁は南岸では見られない。また、北岸・南岸を問わず、マジに代表される南風にはオイテのよ

うな人の利用は見られないし、そもそもそうしたことを受け付けない厳しさが周防大島のマジにはある。

（二）風に対する意識の違い——西風と東風——

西方向と東方向の風を比べた場合、周防大島の一般的傾向として、人は東風よりも西風の方により敏感であるといえる。この点は南岸・北岸を問わず認められることであり、また島という立地環境とも関係しない。これは汎日本的に認められる傾向であり、いわば「天気は西から変わる」という一般的な民俗知識と合致する。

西風への敏感な対応は、周防大島では具体的に風名の数に現れる。たとえば、日良居では、西方向の風を、アナジ（北西）・ニシアナジ（北西）・ニシ（西）・マジニシ（南西）というように細かに分類し、それぞれに漁や天候に関して特別な意味を付与している。また、久賀では西風について、それが吹く季節や時間帯またその性格に応じて、チョウセンカゼ・オーギノマト・ハルイチバンといった多様な風名を設定しており、同時にとくに強いニシをオオニシと呼んで区別したりもしている。

また、もうひとつ西風と東風における意識の違いとして挙げられるのは、季節風や台風といった大スケール（地球規模）の風との係わりについてである。

西風は、北岸の村にとっては北系統の風と結びついて強く認識される。これは東風にはない特徴である。とくに北西から吹いてくる強風のアナジは北系統の風のなかではもっとも注意を要する風であり、当然漁に与える影響は大きいと認識されている。西風と北系統の風は、冬の北西季節風に由来するもので、もともと関連づけられやすいともいえる。

反対に、東風は、南岸の村にとって南東季節風のもと南系統の風と関連づける意識が高いかというところでもない。むしろ、季節風よりは、夏の台風の時に、南系統の風と関連づけてとらえる意識が高い。そのと

き、「コチが強くなるとマジになる」というように、台風の周防大島への接近に際して、風向の変化段階として東風と南系統の風とは強く関連づけられる。

つまり、西風と東風に対する意識を比較すると、周防大島では以下のような対比が可能である。

西風Ⅱ（北系統の風との関連性…大）―（季節風の影響…大）―（冬の風への意識…大）―（北岸の村）

東風Ⅱ（南系統の風との関連性…大）―（台風の影響…大）―（夏の風への意識…大）―（南岸の村）

風に限らず気象全般において、島の西と東とでは、周防大島の人はおおむね西に対する意識が高い。観天望気はほとんどが西向きにおこなわれることにそれが現れている。天気を予測するとき眺めるのはたいいてい西側にある山や島である。例えば、沖家室では南西方向にある平郡島を見て島に「笠釜」（笠状の雲）をかぶると突風が来ると言ったり、久賀ではイヌイ（戌亥…北西方向）を見てその雲の様子から次の日の天候を予測していた。また、周防大島に多大な影響をもたらす台風も、島の西側を通るときは東側を通るときに比べるとるかに多くの注意が払われる。西側を台風が通過するときの方が風雨が激しくなるためである。

こうした意識の根底にも、先に述べた「天気は西から変わる」という民俗知識がある。当然、観天望気の意識が西側に向いているのも、周防大島だけの問題ではなく、汎日本的なことだといえよう。

一方で、周防大島の立地も、西への関心を高める要因となっている。それは、瀬戸内海への潮の出入り口である豊後水道が周防大島から見ると南西に存在することと関連する。瀬戸内海への潮の流入は九州と四国に挟まれ隘路となる豊後水道からなされるが、そこに生まれる強い潮流が南系統の風と相乗効果を生み出し、たとえば波を大きくし、強いうねりを生み出すなど、漁業のみならず住民生活に多大な影響をもたらすか

らである。この点は、島の立地がもたらす、周防大島に固有な要因といってよからう。

注

本稿においても漁業者をターゲットに聞き取り調査をおこなっているが、それは島という環境条件に焦点を当てているためである。沿岸部とともに内陸地の風名についての考察は別稿（安室、二〇一〇）にておこなっている。

引用参考文献

- ・北見俊夫 一九八九 『日本海島文化の研究―民俗風土論的考察―』法政大学出版局
- ・関口 武 一九八五 『風の事典』原書房
- ・宮本常一 一九三六 『周防大島を中心としたる海の生活誌』（『宮本常一著作集38』、未来社、一九九四）
- ・宮本常一 一九九七 『周防大島民俗誌』（『宮本常一著作集40』、未来社、一九九七）
- ・安室 知 二〇一〇 「自然の民俗」山口県編『山口県史 民俗編』山口県
- ・柳田国男 一九五八 『故郷七十年』（『定本柳田国男集 別巻3』所収、筑摩書房、一九七二）
- ・和辻哲郎 一九三五 『風土―人間的考察―』岩波書店
- 「オンライン文献」
- ・周防大島町ホームページ <http://www.townsuosshima.jp/seisakukikaku/outline.html> 二〇一五・九・一